

1. これは、あなたの父祖の神、主が、あなたに与えて所有させようとしておられる地で、あなたがたが生きるかぎり、守り行なわなければならないおきてと定めである。
2. あなたがたが所有する異邦の民が、その神々に仕えた場所は、高い山の上であっても、丘の上であっても、また青々と茂ったどの木の下であっても、それをことごとく必ず破壊しなければならない。
3. 彼らの祭壇をこわし、石の柱を打ち砕き、アシェラ像を火で焼き、彼らの神々の彫像を粉碎して、それらの名をその場所から消し去りなさい。
4. あなたがたの神、主に対して、このようにしてはならない。
5. ただあなたがたの神、主がご自分の住まいとして御名を置くために、あなたがたの全部族のうちから選ぶ場所を尋ねて、そこへ行かなければならない。
6. あなたがたは全焼のいけにえや、ほかのいけにえ、十分の一と、あなたがたの奉納物、誓願のささげ物、進んでささげるささげ物、あなたがたの牛や羊の初子を、そこに携えて行きなさい。
7. その所であなたがたは家族の者とともに、あなたがたの神、主の前で祝宴を張り、あなたの神、主が祝福してくださったあなたがたのすべての手のわざを喜び楽しみなさい。
8. あなたがたは、私たちがきょう、ここでしているようにしてはならない。おのおのが自分の正しいと見ることを何でもしている。
9. あなたがたがまだ、あなたの神、主のあなたに与えようとしておられる相続の安住地に行っていないからである。
10. あなたがたは、ヨルダンを渡り、あなたがたの神、主があなたがたに受け継がせようとしておられる地に住み、主があなたがたの回りの敵をことごとく取り除いてあなたがたを休ませ、あなたがたが安らかに住むようになるなら、
11. あなたがたの神、主が、御名を住まわせるために選ぶ場所へ、私あなたがたに命じるすべての物を持って行かなければならない。あなたがたの全焼のいけにえとそのほかのいけにえ、十分の一と、あなたがたの奉納物、それにあなたがたが主に誓う最良の誓願のささげ物とである。
12. あなたがたは、息子、娘、男奴隷、女奴隷とともに、あなたがたの神、主の前で喜び楽しみなさい。また、あなたがたの町囲みのうちにいるレビ人とも、そうしなさい。レビ人にはあなたがたにあるような相続地の割り当てがないからである。
13. 全焼のいけにえを、かつて気ままな場所でささげないように気をつけなさい。
14. ただ主があなたの部族の一つのうちを選ぶその場所で、あなたの全焼のいけにえをささげ、その所で私が命じるすべてのことをしなければならぬ。
15. しかしあなたの神、主があなたに賜った祝福にしたがって、いつでも自分の欲するとき、あなたのどの町囲みのうちでも、獣をほふってその肉を食べることができる。汚れた人も、きよい人も、かもしかや、鹿と同じように、それを食べることができる。
16. ただし、血は食べてはならない。それを地面に水のように注ぎ出さなければならない。
17. あなたの穀物や新しいぶどう酒や油の十分の一、あるいは牛や羊の初子、または、あなたが誓うすべての誓願のささげ物や進んでささげるささげ物、あるいは、あなたの奉納物を、あなたの町囲みのうちで食べることはできない。

18. ただ、あなたの神、主が選ぶ場所で、あなたの息子、娘、男奴隷、女奴隷、およびあなたの町囲みのうちにいるレビ人とともに、あなたの神、主の前でそれらを食べなければならない。あなたの神、主の前で、あなたの手のすべてのわざを喜び楽しみなさい。
19. あなたは一生、あなたの地で、レビ人をないがしろにしないように気をつけなさい。
20. あなたの神、主が、あなたに告げたように、あなたの領土を広くされるなら、あなたが肉を食べたくなったとき、「肉を食べたい。」と言ってよい。あなたは食べたいだけ、肉を食べることができる。
21. もし、あなたの神、主が御名を置くために選ぶ場所が遠く離れているなら、私があなたに命じたように、あなたは主が与えられた牛と羊をほふり、あなたの町囲みのうちで、食べたいだけ食べてよい。
22. かもしかや、鹿を食べるように、それを食べてよい。汚れた人もきよい人もいっしょにそれを食べることができる。
23. ただ、血は絶対に食べてはならない。血はいのちだからである。肉とともにいのちを食べてはならない。
24. 血を食べてはならない。それを水のように地面に注ぎ出さなければならない。
25. 血を食べてはならない。あなたも、後の子孫もしあわせになるためである。あなたは主が正しいと見られることを行なわなければならない。
26. ただし、あなたがささげようとする聖なるものと誓願のささげ物とは、主の選ぶ場所へ携えて行かなければならない。
27. あなたの全焼のいけにえはその肉と血とを、あなたの神、主の祭壇の上にささげなさい。あなたの、ほかのいけにえの血は、あなたの神、主の祭壇の上に注ぎ出さなければならない。その肉は食べてよい。
28. 気をつけて、私が命じるこれらのすべてのことばに聞き従いなさい。それは、あなたの神、主がよいと見、正しいと見られることをあなたが行ない、あなたも後の子孫も永久にしあわせになるためである。
29. あなたが、はいつて行って、所有しようとしている国々を、あなたの神、主が、あなたの前から断ち滅ぼし、あなたがそれらを所有して、その地に住むようになったら、
30. よく気をつけ、彼らがあなたの前から根絶やしにされて後に、彼らにならって、わなにかげられないようにしなさい。彼らの神々を求めて、「これらの異邦の民は、どのように神々に仕えたのだろう。私もそうしてみよう。」と言わないようにしなさい。
31. あなたの神、主に対して、このようにしてはならない。彼らは、主が憎むあらゆる忌みきらうべきことを、その神々に行ない、自分たちの息子、娘を自分たちの神々のために、火で焼くことさえしたのである。
32. あなたがたは、私があなたがたに命じるすべてのことを、守り行なわなければならない。これにつけ加えてはならない。滅らしてはならない。

説教

申命記 12 章からは、これまで教えられてきた律法の、細かい具体的な規則が教えられます。

12 章では十戒の第一戒・二戒のより実際的な教えが説かれます。「十戒」は、一言で要約すると、神と人を愛する戒めですが、前半の、神を愛する五つの戒めのうち、第一戒と第二戒の神礼拝に関する具体的な教えが、12 章で説かれます。それは神の民にとって何より大切な礼拝生活のことです。

まず、これから命じることが、カナンで「あなたがたが生きる限り、守り行なわなければならないおきてと定め

である」と言われます(1)。そして初めに、カナン入植後には、異教の礼拝場所を「ことごとく必ず破壊しなければならない」と教えます(2)。「彼らの祭壇をこわし、石の柱を打ち砕き、アシェラ像を火で焼き、彼らの神々の彫像を粉碎して」、「それらの名」さえも「消し去りなさい」と言うのですから、徹底しています(3)。

カナンの宗教は、男神バアルと女神アシェラを信奉する五穀豊穡祈願の農業宗教で、多産奨励であるため、姦淫が、公然と、しかも「神聖な？」宗教儀式として、神殿を中心に行われていました。イスラエルは、そのただ中に入っていくのですから、それらとどう関わるかが、当然問題となります。それでモーセは、それら地元の宗教と一切関わりを持たないようにすることは勿論、のみならず、異教の礼拝所を「ことごとく必ず破壊せよ」と厳しく命じます。この世の異教邪教は、人間の欲を巧みにそそりながら心に入り込んでいきます。「姦淫するな」という教えより「姦淫しろ」という教えの方が、罪深い人間の性質にうまく合うのです。ですから、こうした邪教と上手に共存することなどできません。ミイラ取りがミイラになってしまいます。毅然と対処しなければなりません。

それでは、神の民はどのように神を礼拝すればいいのでしょうか。「ただあなたがたの神、主がご自分の住まいとして御名を置くために、あなたがたの全部族のうちから選ぶ場所を尋ねて、そこへ行かなければならない。」(5) 神が「名を置く」とは、そこに神の主権が置かれていることを意味します。つまり、神がご自身を礼拝するために選んだ特別な「神の場所」に行けと言うのです。

行って何をするのでしょうか。神を礼拝します。「あなたがたは全焼のいけにえや、ほかのいけにえ、十分の一と、あなたがたの奉納物、誓願のささげ物、進んでささげるささげ物、あなたがたの牛や羊の初子を、そこに携えて行きなさい。」(6) ここでは七種類の「いけにえ」が列挙されています。使徒パウロ言いました。「あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。」(ローマ 12:1) この定義の通り、礼拝の本質は、神の恵みに応えて、神に献身することです。神が特別に選んだ場所に行って、何をしろとモーセが言っているかと言えば、要するに、神を礼拝しなさいと言うのです。

礼拝とは、神から恵まれるために行くものではありません。なぜなら、恵みは既に神から充分受けているからです。その恵みに感謝して、感謝のいけにえを捧げる、「十分の一」をはじめ「いけにえ」をささげて、自らも神に身を捧げて献身する、これが神に喜ばれる真の礼拝です。ちなみにこの礼拝について、「全焼のいけにえを、勝手気ままな場所でささげないように気をつけなさい」と注意書きが添えられます(13)。異教の礼拝所はあちこちに散在していました。これに対し、イスラエルは、人間中心にではなく、神を中心に、「ただ主があなたの部族の一つのうちに選ぶその場所で」礼拝するよう命じられます(14)。神を礼拝する礼拝は、神に喜ばれるものでなければなりません。この世の異教邪教のように、人間が自分の自己満足のために礼拝しても何の意味も無いのです。神に喜ばれるように、神を中心に、神が望むあり方で、神を礼拝しなければなりません。それで、「勝手気ままな場所」ではなく、神が「選ぶ場所」で礼拝するのです。

7節では、神に礼拝をささげた後どうすべきかが教えられています。「その所であなたがたは家族の者ととも、あなたがたの神、主の前で祝宴を張り、あなたの神、主が祝福してくださったあなたがたのすべての手のわざを喜び楽しみなさい。」(7) 「祝宴を張る」とは、単純に「食べる」の意味です。神を礼拝した後は、一緒に食事をしながら、どんなに神の恵みを受けているかを思い出しながら、家族で喜びを分かち合うのです。礼拝でささげる「いけにえ」の中には、「(和解のいけにえの一種である) 誓願のいけにえ」のように、神にささげ、祭司に与えた残りを自分たちで一緒に食べるという「いけにえ」もありました。単純に言って、食事というものは、理屈抜きで、楽しく、嬉しく、おいしくて、何より、喜ばしいものです。よくわからない難しい話を聞くより、飲み食いすることで、最も原始的に、神の恵みを正真正銘、まさに「味わう」ことができます。だから、飲み食いはバカにできません。

そもそも人は、食べれば生き、食べなければ死にます。イエスさまはご自身を「いのちのパン」と称します。「わたしを食べる者は永遠に生きる」と、誰にでもわかるよう、ご自身がいのちの糧であることを説明なさいました。そして「聖なる晩餐」によって、永遠のいのちの恵みを最も深く我が身に味わい、思い出すようになさいました。福音を、耳で聞いて、頭で理解するのみならず、パンとぶどう酒を飲み食いするという、最も単純で、原始的な方法によって、永遠のいのちの恵みに生かされていることを思い出すようお命じになりました。

こうして、神に愛され、生かされていることを、礼拝によって知るのみならず、礼拝後の会食を通して実感します。おいしい物を食べながら、神の恵みを喜び合います。理屈抜きで、素直に喜び合います。神が罪深いこの私を愛し、生かしてくださっていることを、まさしく「いのちの糧」を食べながら、神の家族と共に喜ぶのです。そしてこの喜びは、「息子、娘」のみならず、「男奴隷、女奴隷」、さらには「あなたがたの町囲みのうちにいるレビ人」へと広がっていきます。これが7、12、18-19節でも再三繰り返されて、教えの大切さが強調されます。

教会でも礼拝後に愛餐会の食事をしていますが、とても大切なことです。それは、神に愛され、生かされている恵みを、理屈抜きで一緒に食事をしながら、共に喜び合う貴重なひとときです。勿論、礼拝は何より大切な教会のつとめですが、それに続く愛餐会もまた、重要な教会の営みです。それは単なるこの世の食事会ではありません。神に愛され、生かされている恵みを、同じ神の家族が、共に味わい、共に感謝し、喜びを分かち合う貴重な時なのです。この意味で、愛餐会の費用を教会が全額負担して然るべきだと私はずっと思っています。ここでしか、礼拝で恵まれた喜びを分かち合うことはできません。職場や学校で信仰の恵みを話しても、わかってもらえません。

礼拝後の愛餐会の教えに、繰り返し付け足される教えがあります。それは「レビ人に心を配るように」との教えです。「また、あなたがたの町囲みのうちにいるレビ人とも、そうしなさい。レビ人にはあなたがたにあるような相続地の割り当てがないからである。」(12) 「ただ、あなたの神、主が選ぶ場所で、あなたの息子、娘、男奴隷、女奴隷、およびあなたの町囲みのうちにいるレビ人とともに、あなたの神、主の前でそれらを食べなければならない。」(18) 19節には念を押すようにこう言われています。「あなたは一生、あなたの地で、レビ人をないがしろにしないように気をつけなさい。」

「レビ人」は、神の幕屋で奉仕する、いわば教会献身者です。神の働きをする彼らは、神ご自身が彼らの相続地だということで、カナンに入っても自分の相続地を持つことができません(民数記 18:20)。その代わり「彼らが会見の天幕の奉仕をするその奉仕に報いて、イスラエルのうちの十分の一をみな、相続財産として与える」とのみことばの通り、人々が神にささげた「十分の一」献金がレビ族に支給されて、彼らの生活を一生涯支えました(18:21)。礼拝後の愛餐会で、神の恵みを味わう喜び絶頂のその時に、自分だけ神に感謝し、喜んで、それで終わりというのではなく、神の働きに日夜励む、神の人である「レビ人とも、そうしなさい」と命じられます。神の恵みに感謝し、神の家族と共に喜びを分かち合うのはいいけれど、その傍らで神の働きに励む「レビ人」が寂しい思いをしているなら悲しいことです。「ないがしろにする」という言葉は「見捨てる、放置する」の意味です。牧師が死んでも、退職金さえ出さない教会もあります。弱い者いじめで、牧師夫婦を見殺しにしようと思えばいくらでもできるのですが、神を礼拝し、感謝と喜びを味わうその時にこそ思い出せと言うのです。「あなたは一生、あなたの地で、レビ人をないがしろにしないように気をつけなさい。」これは、本当に神の恵みを知る者だけができることです。「自分の息子、娘」なら、誰でも大切にします。でも、自分と関係の無い「レビ人」「主の働き人」を大切にすることは、神の恵みに感謝する者だけができることです。信仰が問われるのです。何を信じているのか、どういう信仰を持っているのか、信仰の内実が問われます。感謝、感謝と言うけれど、何が感謝なのかという実質です。

「レビ人」は、一生涯、幕屋で主の奉仕をする人です。彼らがいるから、人々は余計なさばきを受けなくてもすみませんでした。いけにえを屠って、罪贖われます。神と和解できます。平和に生活できます。神を知り、神との交わり

に生きることができるのです。牧師も同様です。牧師の語る聖書の解き明かし（説教）を通して、人々は神のこ
とばを教えられ、神を知ります。霊とまことをもって神を礼拝し、神への感謝と喜びを私たちの隣人に豊かに分かち
合う、祝福された信仰生活を送りたいと思います。